論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル：

Association between maternal vegetable intake during pregnancy and allergy in offspring: Japan Environment and Children's Study

和文タイトル：

妊娠中の野菜摂取と一歳時点における児のアレルギー発症との関連についての研究

ユニットセンター（UC）等名：　メディカルサポートセンター

サブユニットセンター（SUC）名：

発表雑誌名：　PLOS ONE

年：2021　DOI：　10.1371/journal.pone.0245782

筆頭著者名：　小川浩平

所属UC名：　メディカルサポートセンター

目的：

妊娠中の野菜摂取量や野菜に関連する栄養素摂取量と、出生後児が1歳になったときのアレルギー発症リスクとの関連に着目して調査を行いました。野菜摂取量は妊娠中に行われた食事摂取に関する質問紙票の回答を、児のアレルギーは1歳時に行いご両親に記載していただいた質問紙の回答を用いて評価しました。

方法：

質問紙未回答の参加者や双胎妊娠例は研究対象としませんでした。質問紙から推定された妊娠中の野菜摂取量に応じて、参加者を5群に分類しました。各群において、児が1歳時にどのくらいの割合でアレルギーを発症しているかについて頻度を調べました。アレルギーとして、喘鳴有症率、喘息発症率、湿疹有症率、アトピー性皮膚炎有病率、食物アレルギーを検討しました。野菜に関連する栄養素に関しても、同様の検討を行いました。

結果：

今回の研究における対象者は80,270人になりました。各群に分けた後のアレルギー発症率について調べたところ、ほぼ全てのアレルギーについて野菜摂取量による有意な発症率の違いを認めませんでした。また、この関係は野菜全体だけではなく、緑黄色野菜、葉野菜と言った野菜を亜分類した時も同様であり、野菜に関連する栄養素の摂取量についても同様に有意な関連を認めませんでした。

考察：（研究の限界を含める）

従来より野菜には抗酸化作用や抗炎症作用が有り、小児期や成人期にはアレルギーに予防的に働くことが示唆されていました。このことから妊娠中に摂取を行った場合、胎児に対してアレルギーの予防的効果があることが以前より期待されましたが、今回のような大きなデータベースを用いた研究でもその効果ははっきりとは証明されませんでした。ただし、1歳時のアレルギーは、その後に発症してくるアレルギーとは完全に同じではないため、その後のアレルギー発症の予防になる可能性は否定できず、妊娠中に野菜を取る必要がないとは言えないことに注意は必要です。

結論：

妊娠中の野菜摂取は、少なくとも1歳時点での児のアレルギー疾患の発症には大きな影響がないことが示唆された。